

「リスクコミュニケーション」における課題

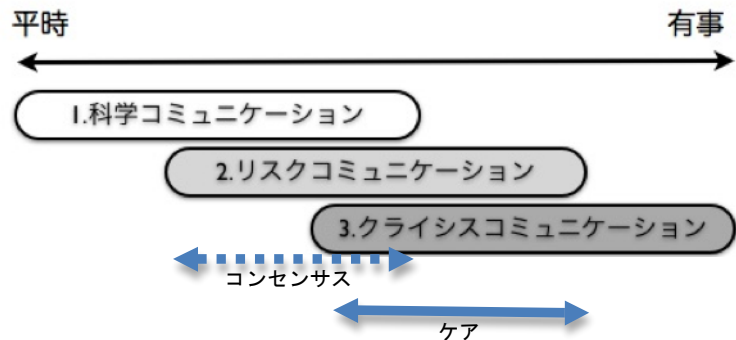
130325-安全・安心科学技術及び社会連携委員会@文部科学省

早稲田大学政治経済学術院ジャーナリズムコース 准教授 / (社)サイエンス・メディア・センター リサーチ・マネージャー 田中幹人
＜震災後のメディア分析や科学とメディアの架橋実践に取り組んでいる立場から考えていることについて（自戒を込めて）記述します＞

- 震災後、日本の科学技術関連領域で盛んに語られるようになった「リスクコミュニケーション」
 - ・しかし、その定義にはすれ違いや我田引水な解釈が目立つ（ように思える）。
 - ・「科学技術コミュニケーション」と同様の展開が予想される：多義化・日本独自の定義化
→Risk Communication Studiesの先行知を活用できず、将来に問題を先送りする可能性
- 「リスク」の定義・用法も「専門家」のあいだでバラツキがある：リスクコミュの混乱へ接続
 - [リスク] = [ハザード] × [確率 (Probability)] …工学・理学等
 - [リスク] = [ハザード] × [暴露量(Exposure)] …理学・医学等
 - [リスク] = [コスト (ハザード)] / [ベネフィット] …経済学、政治等
 - [リスク] = [そもそも社会的弱者に対し富と同様に不公平に配分されるもの] …社会学等
 - [リスクコミュニケーション] = [ハザード] + [感情(outrage)]

科学技術知だけではリスクを適切に扱いきれない＝リスクコミュには失敗する
多くは「リスク」の語を用いるうちに「自己責任論」に漸近していく傾向

- 科学技術コミュニケーションの現状と科学技術のリスクを踏まえたコミュニケーションの展望
 - ・科学技術コミュ：諸外国に比肩するレベル (cf. 科学ライティング) / 説得的, 知識の付与
 - ・科学技術リスクコミュ：未発達, 未踏領域 (cf. 科学ジャーナリズム) / 議題構築的
 - ・平時～有事のグラディエーション



- ・Lundgren & McMakin のリスクコミュの2位相定義：
 - ケア・コミュ＝父権主義的
 - コンセンサス・コミュ＝合意形成目的
- 科学ライティング**
 - 目的：科学の面白さ、成果を伝える。
 - 忠誠の対象：科学という営為
 - 問題発生時：科学の論理を優先
- 科学ジャーナリズム**
 - 目的：科学のまつわる社会的議題の構築を助ける
 - 忠誠の対象：公共圏 / 市民
 - 問題発生時：社会の脆弱性 / 市民被害 / 公共の利益を優先

- 国民への不確実な可能性のあるデータの適切な提示はどうあるべきか？

前提：リスク研究成果＝「有事の際に人々が知りたいのは『どれくらい安全か』ではなく『どれくらい危険か』」

 - ・基本的には、平時における取り組みこそが有事に実効性を持つ (ex. 震災時の放射線知識)
 - ・データの提示方法や免責範囲といった ELSI をデータ生成の仕組みのなかに組み込む (ex. SPEEDI)
→ 研究開発開始時に、(従来の倫理的配慮のように) ELSI の配慮を必要とする発想を広げる。
→ [研究計画：アクセル, ELSI 配慮：ブレーキ, ガバナンス：ハンドル] という理解の周知
- 国民と専門家のリスクに関する共通認識を構築するために必要な環境？
 - ・透明性の維持 (≠ 全ての議事を公開する) → 最重要であり受け入れられやすい表現＝「検証可能性」.
 - ・メディアにおける (に対する) リスク表現の洗練 / 教育内容の改革 (Science & Society 以降の英国事例)
- 科学技術分野における社会とのコミュニケーションの「接点となる専門家」とはどのような人材か？
 - ・「相互作用の専門性 (interactional expertise, 媒介の専門性)」を持つ人材.
 - ・ → しかし、こうした人材の (社会における) 育成及び維持は難事。
(ex. 「パブリック・リレーションズ」 ≠ [Publicity / ピアール / 広報])
現代の民主的コストとして割り切れるか？
- (最後に) インターネットに対する「誤解」？

「インターネット、特にソーシャルメディアはリスクに関する妄言を増幅している」
→ インターネットは情報発送コストを下げたが、同時に情報の管理コストを増大させた (だけ)。
「ソーシャルメディアは人々に紐帯をもたらした」
→ 分断・分節化された情報空間に閉じこもることも可能にした
どのように情報に「介入」するかという問題.